大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『伊勢物語』補充章段をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片桐, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005065

『伊勢物語』補充章段をめぐって

片桐洋一

一　非定家本独自章段の本文の性格

現在、新刊書店で購い得る『伊勢物語』は、藤原定家が天福二年（一二三四）に書写した本の系統に限られていると言ってよい。

と言っても、定家の真筆本は存在せず、

天福二年正月廿日己未申刻、凌桑門之盲目、連日風雪之中、遂此書写、為授鍾愛之孫女也。同廿二日校了。

という定家の奥書を含めて、定家筆本を三条西実隆（一四五五―一五三七年）が忠実に写した学習院大学所蔵本か、冷泉為和（一四八六―一五四九年）がやはり定家自筆本を忠実に書写したものとされている宮内庁書陵部本を底本にして活字にしたものが使われているのである。

しかし、これらの定家書写本系統の本にはない、非定家本独自の章段を持つ伝本も伝存しており、これらには定家本系統の『伊勢物語』だけを見ていると、目にすることのない章段がかなり存在しているのである。

たとえば、定家本などの百二十五段本に比べて十章段ほども段数が少ないゆえに「略本系」と呼ばれている本間美術館所蔵の伝民部卿局筆本では、「からうじて盗みいで」た女が「鬼一口」に喰われて死んだという定家本第六段の後に、やはり「女を盗みて」と書かれている次の章段を置いている。

〔補充章段B（注1）〕

昔、をとこありけり。女をぬすみていてゆくみちにて、「みづのまむ」ととふに、うなづきければ、つきなむどもぐせ

ねば、手にむすびてのます。さて、ゐてのぼりにけり。をむな、はかなくなりにければ、もとの所へゆくみちに、かのし水のみし所にて、

おほはらやせかひの水をむすびあげてあくやといひし人はいづらは

といひて、きゑにけり。あはれ〳〵といへど、かひなし。

とある。

この本の場合、「おほはらやせかひの水をむすびあげて…」という歌を詠んだのは、「女」であり、「おほはらやせかひの水をむすびあげてあくやといひし人」は「男」でなくてはならないから、「をむな、はかなくなりにければ」は「女が死んでしまった」ということではなく、「をむな」は「もとの所へゆくみちに」に続き、「はかなくなりにければ」は「(男が) はかなくなりにければ」というように、「男」のことを言っていると見なければ、「あくやといひし人はいづらは」と矛盾してしまう。

それはともかく、伝民部卿局筆本が、この段をここに置いたのは、定家本第六段の「からうじて盗み出で」た女を男が連れてゆくという話との類似性によると見てよかろう。

一方、真名本では、この「おほはらやせかひの水をむすびあげて」の段〔補充章段B〕が、第二十九段の次に置かれていて、

昔、男、女乎盗而往道尓、水有所尓而、夫「将呑哉」与問尓、領拝 計礼波、 結而 為呑。 然将而 往尓、 率尓墓将成。
壮士本所江還尓、彼水飲志所尓而、
大原哉堰之志水尾結上而飽哉与問志人者笋等

とある。

こちらは、「壮士本所江還尓」とあるので、「率尓墓将成」ったのは「女」のこととしなければならぬが、それでは「飽哉与問志人者笋等」と矛盾してしまう。「壮士本所江還尓」の「壮士」と「本所江還尓」の間に脱落があるのではないかと思われる。「飽哉与問志人者笋等」とある限り、歌を詠んだのは「女」であり、「男」が「墓将成」たと見るほかなく、真名本の本文に欠陥があると見なければならないのである。

真名本は、たとえば「もとの所へかへるに」を「本所江還尓」と書いているように、室町時代以降の成立と見なければならないが、真名表記をされる以前の姿は、かなり古い本文を持っていたと見てよさそうである。ちなみに、大英図書館本『伊勢物語絵巻』と小野家本『伊勢物語絵巻』では、第二十九段の次で

はないが、その次の第三十段に連続して、この章段に該当すると思われる絵が置かれている。(注2) 真名本に限らず、この章段がこのあたりに置かれていた痕跡は残っているのである。

ただし、真名本が伝える本文はかなり乱れている。たとえば、「率尓墓将成」ったのは、男であろうか、女であろうか。真名本の本文では定かではない。続いて「壮士本所江還尓」とあるのだから、死んだのは「女」としか読めない。しかし、歌に「飽哉与問志人者笋等」とあるのは、やさしく水を飲ませてくれた男のことを女が回想していることを示している。まさしく、真名本の本文が混乱している、誤っていると見るほかないのである。

このように、伝民部卿局筆本と真名本は、この「大原やせかゐの水を…」の段を、その本の配列の中に持っている。しかし、他の多くの本では、全体の物語が終る終焉辞世の段（定家本第百二十五段）の後に、いわば参考資料として他系統本を引用する形で記しているのである。

たとえば、国立歴史民俗博物館所蔵の大島家旧蔵伝為氏筆本では、

或本云、

これよりしもは、この本になきをえりいでゝかきつらねたる也。小式部内侍が自筆の本にあるなり。

と記して、小式部内侍筆本から補った二十四章段が付載されているのであるが、その中に、これと同じ内容の章段が見られる。

むかし、おとこ、女をぬすみてゆくみちに、水のあるところにて「のまん」ととふに、うなづきければ、てにむすびてのます。さて、ゐてのぼりけり。おとこなくなりにければ、もとのところにかへりゆくに、かのみづのみしところにて、

おほはらやせかゐの水をむすびつゝあくやといひし人はいづらは

とあって、この場合は、男が亡くなったので、女が「もとのところにかへりゆくに」、かつて水を飲ませてくれた所で、やさしかった男を思い出して、女が歌を詠んだと言っているのであって、文章は明快、歌の詠み手をはじめとして人間関係はよくわかる。

また、天理図書館所蔵の伝為家筆本は、本体は定家の根源奥書本であるが、その後に別系統本で補った章段が見られる、そ

の中に、

むかし、をとこ、女をぬすみて行。水ある所にて、おとこ「のまんや」とゝふに、うなづきければ、てにむすびてのます。さてゐてのぼりにけり。おとこけゝなくなりにければ、もとの所へかへりゆくに、みづのみし所にて、

おほはらやせかゐの水をむすびあげてあくやとゝひし人はいづらは

とある。

「はかなくなりにければ」を「けゝなくなりにければ」と読める文字に誤写しているほかは、ほぼ一致しており、この伝為家筆本の巻末補充本文が、やはり小式部内侍本によって補った本文であることがわかるのである。

それに対して、前述した国立歴史民俗博物館所蔵の大島家旧蔵本に見られる皇太后宮越後本による補充本文では、

むかし、女をぬすみてなんゆく。みちに、みづのあるところにて「のまんや」とゝふに、うなづきければ、つきなどもぐせざりければ、てにむすびてくはす。ゐてのぼりければ、もとのところにかへりゆくに、かのみづのみしところにて、

おほはらやせかひのみづをむすびつゝあくやとゝひし人はいづらは

といひてきえにけり。はれ〳〵。

とあるが、この場合、「ゐてのぼりければ」と「もとのところにかへりゆくに」の間に「男はかなくなりにければ」という内容の文が脱落していると見なければなるまい。

また宮内庁書陵部所蔵の阿波国文庫旧蔵本の帖末増補本文の場合も（宮内庁書陵部所蔵谷森本や神宮文庫本も同じ）、

むかし、をんなをぬすみてゆくみちに、みづあるところにて、「のまんや」とゝふに、うなづきければ、つきなどもぐせざりければ、てにむすびてくはす。さて、のぼりにければ、もとのところにかへりゆくに、かのみづのみしところにて、

おほはらやせかひのみづをむすびつゝあくやとゝひし人はいづらは

といひて、きへにけり。あはれ〳〵。

とあって、同じように「男はかなくなりにければ」という内容の文が脱落していると見られるために、「さて、のぼりにければ、もとのところにかへりゆくに」の主体が男なのか女なのかわからないのである。

以上に見て来たように、『伊勢物語』に補充されている非定家本系の独自本文は、本来その本が持っていなかった幾つかの系統の本文をかなり無理をして採用して整定されているために、意が通じにくい本文になっている場合が多い。つまり、これらの本文は、通じ難い点が多い特殊な本文だという意識で書写され、享受されて来たと言ってもよいのではないかと思うのである。

二　非定家本独自章段の古さ

前章で問題にした〔B段〕の「大原やせかゐの水」の段が、いつ『伊勢物語』に加えられたのかはわからない。しかし、非定家本の多くがこの段を持っていることを思えば、意外に古いのではないかとも思われる。

一方、定家本がこの段を持たないのは、「男」がここで死んでしまうのでは、「昔男」の一代記としてまとめられている今の『伊勢物語』に定着し難かったからではないかと思われる。

この「大原やせかゐの水」の段が、かなり古いものであることは、『伊勢物語』の絵巻の歴史に残る逸品『梵字経刷白描伊勢物語絵巻』(注3)に絵画化されていることによってもわかるが、ここに問題にしようとしている〔補充章段J〕の東下りの宇津の山の章も、『伊勢物語』の生成にかかわる古さを持っている。

むかし、おとこ、すゞろなるみちをたどりゆくに、するがのくに、うつのやまくちにいたりて、わがいらんとする道にはいとくらうほそきに、つた・かへではしげり、物こゝろぼそくおもほえて、すゞろなるめを見る事と思ふに、すぎゆくにさしあひたり。「かゝるみちにはいかでかいまする」といふをみれば、みし人なりけり。「京にその人のもとに」とて、ふみかきてつく。

なかぞらにたちゐる雲のあともなく身のいたづらになりぬべきかな

とてなんつけゝる。

かくて思ひゆくに、

するがなるうつみの山のうつゝにもゆめにも人にあはぬなりけり

とおもひゆきけり。

誰もがわかるように、第九段の「東下り」の第二部分「宇津の山」の章の異伝である。「すぎゆくにさしあひたり」は、おそらく「す行者にさしあひたり」の誤写であろう。

また「するがなるうつみの山」は「するがなるうつのみ山の」の「み」と「の」が誤って入れ替わったのであろう。

さらに「中空に立ちゐる雲のあともなく身のいたづらになりぬべきかな」の歌は、普通本第二十一段にある七首の歌の最後の歌、すなわち、

又々、ありしよりけにいひかはして、おとこ、
忘るらんと思ふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき
返し、
中ぞらにたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな
とはいひけれど、おのが世々になりにければ、うとくなりにけり。

と同じ歌と見られるし、皇太后宮越後本の〔補充章段E〕に、

むかし、おとこ、ある人にしのびてあひかよひければ、かのをとこに、あるひと、
なかぞらに立ちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべきかな

という形で見られる歌と同じと見てよかろう。

右に揚げた普通本第二十一段や、〔補充章段E〕の場合も、主人公の男の歌ではなく、相手の女の歌になっているのが注意されるが、確たる足場が定まらず、はかなくたゆたう人の心を表現する歌であるゆえに、女の歌としても、男の歌としても利用できる歌だったのであろう。

さて、普通本第九段は、知られているように、

＊第一部分　三河の国八橋の場面
＊第二部分　駿河の国宇津の山の場面
＊第三部分　駿河の国富士山の場面
＊第四部分　武蔵・下総の境の隅田川の場面

の四場面から構成されているが、第一部分の「からころもきつつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」と第四部分の「名にしおはばいざことはむ都鳥わが思ふ人は有りや無しやと」の歌は、いずれも、在原業平の作と明記する『古今

集』羇旅（四一〇）と、同（四一一）に先行して流布していたと判断されるし、また第三部分の「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪の降るらむ」の歌は、『西本願寺本業平集』『在中将集』『素寂本業平集』に見え、それらの『業平集』が撰集資料にしていた生成途中の『伊勢物語』に既に存在していたと考えられるのに対して、『業平集』の諸本に採られていない「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」の歌を中心とする第二部分は生成過程のかなり後の段階になって『伊勢物語』に採り入れられたと考えられる、つまり『伊勢物語』と『業平集』諸本との関係から、この第九段第二部分の「駿河なる宇津の山べのうつつにも…」の場面が、かなり後の成立・増補にかかることを私は早くから推理して来たのであるが、[注4] 今、問題にしている小式部内侍本による〔補充章段J〕の存在によっても、このことは確認できたのである。

なぜなら、第九段の第二部分の、

ゆき〳〵て、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦・かへでは茂り、物心細く、すゞろなる目を見ることと思ふに、す行者あひたり。「かゝる道はいかでかいまする」と言ふを見れば、見し人なりけり。「京にその人の御もとに」とて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人に会はぬなりけり。

という部分が既にあれば、前掲〔補充章段J〕のような文章を小式部内侍本が追加補充するはずがないからである。

今の第九段の「駿河なる宇津の山べのうつゝにも…」の部分や、第二十一段の最終部分の「中空に立ちぬる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな」がまだ形成されていなかったから、このような〔補充章段J〕が作られたのであるが、その後、それを再び解体して第九段を今の形に完成させたり、第二十一段の最終部分が今のようにまとめられたと考えれば、小式部内侍本の断片として伝わる〔補充章段J〕は、『伊勢物語』生成史のかなり古い時期の遺品として注目すべきものと見ざるを得ないのである。

三　小野小町章段の増殖

『伊勢物語』に『古今集』のよみ人知らず歌や『萬葉集』の古歌とともに、小野小町の歌が幾つか含まれていることは、よく

知られている。

まず、〔普通本第二十五段〕の

昔、男ありけり。「あはじ」とも言はざりける女の、さすがなりけるがもとに、言ひやりける。

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはで寝る夜ぞひちまさりける

色好みなる女、返し、

みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなであまの足たゆく来る

前の「秋の野に…」の歌は『古今集』恋三（六二二）の在原業平の歌で、後の歌は『古今集』においてそれに続いて並んでいる恋三（六二三）の小野小町の歌である。およそ贈答歌の場合、詠まれている景物や語彙に、共通するもの、対立するものがあって、響き合うものであるが、この場合は、前者が「秋の野」「笹」「朝」「夜」「ひちまさる」などの語を連ねているのに対して、後者は「みるめ」「うら（浦）」「枯れ」「海人」などの語を連ねていて、まったく対応していない。同じ歌集（『古今集』）の同じ部立（恋三）に偶然並んでいた業平と小町の歌を組み合わせて、一つの歌物語にしたつもりであろうが、実際は歌物語になり得ていないのである。

同じようなケースは、非定家本の補充章段にもある。

〔補充章段F〕

昔ありけるいろこのみ女、あきがたになりにけるおとこのもとに、

いまはとてわが身しぐれにふりゆけばことのはさへぞうつろひにける

かへし、きのさねふん

人を思ふこゝろこのはにあらばこそ風のまに〳〵ちりもみだれめ

ここにあげたのは、国立歴史民俗博物館所蔵大島家旧蔵本の帖末に記された小式部内侍本の本文であるが、同じ大島家旧蔵本で、この前の部分に引用附記されている皇太后宮越後本の引用によれば、

むかしありけるいろこのみける女、あきがたになるおとこのもとに、

いまはとてわれにしぐれのふりゆけばことの葉さへぞう

つろひにける

かへし、　紀定文

人を思ふ心のはなにあらばこそかぜのまに〳〵ちりもみだれめ

とある。後者の皇太后宮越後本の方は、「心この葉に」が「心の花に」となっていて、「こゝろこのはに」を「こゝろのはなに」と誤写したものと見られるが、いずれにせよ、『古今集』恋五（七八二・七八三）の

（題しらず）　小野小町

今はとてわが身しぐれにふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

返し　小野貞樹

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ

をそのまま利用して一つの章段にしていることは明らかである。

それにしても、『古今集』では、諸本ともに小野小町と小野貞樹の贈答歌としているのに対して、『伊勢物語』の巻末補充章段では、作者名を「きのさねふん」とか「紀定文」と記しているのはなぜか。「平定文」に擬したのであればまだわかるが、「紀実文」とか「紀定文」とか、ありもしない名をわざと使っているのは何故か。

『古今和歌集目録』によれば、小野貞樹は、嘉祥二年（八四九）春宮少進、斉衡二年（八五五）従五位上、仁寿元年（八五一）甲斐守、貞観二年（八六〇）肥後守とあって、実在人物である。本間美術館所蔵伝民部卿局筆本『伊勢物語』では、第九段の末尾に、

その河渡りすぎて、京に見し、あひて、物語して、「ことづてやある」といひければ、

みやこ人いかゞととはゞやまたかみはれぬ雲井にわぶとこたゑよ

とあるが、この歌は、『古今集』雑下（九三七）に「甲斐守に侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける」という詞書で採られている小野貞樹の歌の利用である。小野貞樹であれば、実在人物であり、このように『伊勢物語』にも歌を用いられている人物であるのに、「紀実文」とか「紀定文」とかいう、ありもしない名を用いているのは何故か。あえてその答えを求

めれば、「実在の世界」とは関係なく、「虚構の世界としての自立」を意識した当時の物語の方法ではなかったかと思うのである。

それにしても、「昔ありける色好み（ける）女」というこの段の書き出しは、前掲普通本第二十五段の「色好みなる女、返し」の延展であることは明らかである。小町の歌を使っている点で、「色好み女」という小町の属性が自立しているのである。

帖末補充章段に『古今集』の小野小町の歌を用いている例はほかにもある。

〔補充章段R〕

昔、色好み、絶えにし人のもとより、

思ひつつ寝ればや人の見えつらんゆめとしりせばさめざらましを

〔補充章段S〕

昔、男、来てかへるに、秋の夜もむなしくおぼえければ、

秋の夜も名のみなりけりあふとあへばことぞともなく明けぬるものを

〔補充章段R〕は、恋二（五五二）「題しらず」の小町作の歌、また〔補充章段S〕は、恋三（六三五）「題しらず」の小町作の有名な歌である。

前述のように、『伊勢物語』では、小町は「色好みの女」という扱いであったが、この〔R段〕では「色好み」は物語の主人公の「男」で、「思ひつつ寝ればや…」の歌を贈って来た「絶えにし人」は、今は業平と没交渉になっている小町のことである。女（小町）は業平のことを何度も思いつつ寝たので夢に見たのだが、夢と知った上で、ずっと見ていたかったと業平を思って詠んでいるのであって、『伊勢物語』の主人公の男の面目は十分である。

一方、〔S段〕の方も、小町のもとへ来ると、長い秋の夜も「ことぞともなく明け」てしまう。小町との一夜は、それほどにすばらしいと言っているのであって、小町もすばらしいが、物語の主人公の業平もすばらしいと言っていて、どの段も色好みの物語としての見事な存在感を示しているのである。

〔補充章段I〕の

昔、男、えうまじかりける人を恋ひわびて

わがやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲かなんよそへつつ見む

とあるのを見て、これは『萬葉集』巻八にある大伴家持が坂上大嬢に贈った歌であって、在原業平とは関係ないはずだと言って怒っても仕方がない。『萬葉集』では大伴家持の歌であるが、『伊勢物語』は『伊勢物語』の主人公の歌として伝えているのである。物語の多くは、異伝だと考えて享受すべきものなのである。『伊勢物語』の中心部分は実在した在原業平の伝として享受して差し支えはない。しかし、伝承されてゆく過程には、こんな話もあるし、またこんな話もあるのだという形で、別の話を次々と異伝として加えてゆくのである。こんな話があるのだ、こんな話が今まで伝わって来ているのだという形で、新しい異伝を次々と語ってゆくのは、まさに物語の方法なのである。

四　享受者も、第二、第三の作者

大津有一博士の『伊勢物語に就きての研究　補遺篇』は、定家本『伊勢物語』全百二十五段に含まれない異本独自章段を、第百二十六段とか、第百三十二段などと呼ばずに、A段・B段・C段・D段……R段・S段と呼んでいるので、本稿においても、それに従って、〔補充章段B〕とか、〔補充章段F〕とか、〔補充章段P〕などと呼んで来た。

さて、〔補充章段A〕は、

あめのいみじうふりくらして、つとめても、なほいみじうふるに、ある人のがりやりし。

ふりくらしふりくらしつる雨の音をつれなき人の心ともがな

かへし、

やゝもせば風にしたがふ雨の音をたえぬ心にかけずもあらなん

（阿波国文庫旧蔵本）

とある。

この段を見ると、普通の『伊勢物語』のように、「昔、男ありけり。…」とか、「昔、男、…」という書き出しではなく、「あめのいみじうふりくらして、つとめても、なほいみじうふるに、」という変わった書き出しになっているのが、まず問題になる。

『伊勢物語』の一章段として書き出されたとは思えないのであるが、加えて問題になるのは、それに続く「ある人のがりやりし」である。「ある人」は、「それを見てある人のいはく『かきつばたといふいつ文字を句のかみに据ゑて、旅の心を詠め』と言ひければ」（第九段）、「ある人『住吉の浜と詠め』と言ふ」（第六十八段）、「ある人の御つぼね」（第三十一段）などとほか

にもあり、「がり」も、「紀有常がり行きたるに」（第三十八段）とあって、必ずしも問題ではないが、「ある人のがりやりし」の「し」は、やはり気にかかる。「昔、男ありけり」と「けり」で文を結んでゆく『伊勢物語』の文章とは違うからである。

それにしても、

あめのいみじうふりくらして、つとめても、なほいみじうふるに、ある人のがりやりし

という文章は、女の立場から一人称で書かれている感じであって、歌集の詞書としてはあり得ても、物語の文章ではない。また「ふりくらしふりくらしつる雨」は、あの「つれなき人の心」と違って、絶えることがないと言っているのであろう。「ふりくらしふりくらしつる雨の音をつれないあの人の心にしたい」と言っているのである。あの雨の音のように、絶えることのない音信がほしい、「自分に音信もくれない『つれなき人』の心も、このように『絶えぬ心』であってほしい」と言っているのである。

それに対する返歌、「ややもすれば、そちらの風次第で（そちらのご都合次第で）強くもなり弱くもなる雨の音を、私の心に喩えないでいただきたい」と言っているのである。『伊勢物語』第十九段の「天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風速みなり」を連想するような応答であって、「風の音の強さは、あなたのお心次第で、強くも弱くもなるのです」と言っているのである。

内容的には、『伊勢物語』にあって、何ら不思議はないが、違和感を感じてしまうのは、文体が女の立場からの第一人称的な感じが強いからであろう。「雨のいみじう降り暮らして。つとめてもなほいみじう降る」中に、『伊勢物語』を書写していた女が、ついみずからの情況を反映した章段を作って書いてしまったという感じである。確たる根拠はないが、この段の文章は、そのように考えてこそ、素直に理解できるのではないかと思うのである。

『伊勢物語』に限らず、写本時代の作品は、享受者もまた、第二、第三の作者であるというのが、作品の生成から享受までを一元的に把握しようとする私の持論であるが、歌を中心とする短い章段からなる『伊勢物語』の場合、「降り暮らし、降り暮らしつる雨の音」を聞きながら、物語を書写していた書写者が、思わずに、「我」を投入し過ぎて、おのずからに第一人称的な文章を書いてしまったのではないかと思うのである。

【注】

（1）以下に揭出した本文は、それぞれの底本を忠実に活字にしたものであるが、漢字と仮名の当て方や仮名遣等は、適宜改めた。

（2）『伊勢物語絵巻絵本大成』（平成十九年。角川学芸出版刊）

（3）『伊勢物語絵巻絵本大成』（平成十九年。角川学芸出版刊）

（4）『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（昭和四十三年、明治書院刊）

（かたぎり　よういち・大阪女子大学名誉教授）